

学校名	兵庫県立神戸特別支援学校
1 ICTを活用した自立活動指導の実際	
(1) 指導期間・指導時数 *以下、研究対象外の児童・生徒への指導及び休憩や打ち合わせ等の時間も含む。 9月27日(火)～11月7日(月)のうち、3日間 9月27日(火)：来校指導 10:00～11:25 10月24日(月)：遠隔システムによる指導 14:50～16:00 11月7日(月)：来校指導 10:30～15:30 (2) 使用した遠隔システム ZOOM(本校の持ち合わせでは長時間に対応できなかったため、連携先より提供を受けた) (3) 指導目標 ○長期目標 ・個別の実態に応じて、日常生活や作業に必要な基本動作を習得し、生活の中で適切な身体の動きができる。 ○短期目標 ・補助的手段を活用しながら、適切な姿勢保持や運動・動作となるよう調整し、より主体的に学習に取り組むことができる。 ・支援を受けながら、成長に応じた身体の管理ができる。 (4) 自立活動の区分・項目 主に「5 身体の動き」 (1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること (2) 姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活動に関すること (3) 日常生活に必要な基本動作に関すること (5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること *以下、今回は「遠隔システムによる指導」の直接の受け手が教員であったことをふまえて記載した。 (5) 指導内容 ・姿勢の見方と適切な調整の方法 ・成長に伴う身体の変化に合わせた取り組み内容 ・補装具等の調整(見直し)や使用時の配慮事項と工夫	

(6) 指導の手立て

- ・ 初回の指導前に連携先指定の様式に生徒の実態や相談内容を記入し、指導を望む点について、できるだけ明確にするようにつとめた。
- ・ 指導助言を受けて改善したもの、取組んだものを動画や写真にして、事前に連携先に提供した。
- ・ 『遠隔システムによる指導』を進めるにあたり、時間配分や動画の共有の仕方、全体の流れ等について、当日の指導開始前に連携先とよく確認をした。

(7) 指導上の工夫

- ・ 連携先の協力を得て、事前にオンラインテストを実施した。
- ・ 初めての試みであるので、連携先とはよく相談を重ねて進め、互いにイメージを共有して実施できるようにした。
- ・ 連携先からの要望等も可能な範囲で対応するようにした。



指導の様子



スピーカーフォン

＊指導の様子の写真は、第2回目の「遠隔システムによる指導」の場面である。教材の写真は、本事業で購入したスピーカーフォンで、「遠隔システムによる指導」の際、有効に活用することができた。

(8) 校内の指導体制

中学部肢体不自由クラス生徒4名

中学部肢体不自由クラス担任4名

(本事業の推進役として、特別支援教育コーディネーター)

＊生徒4名の内1名は、2回の指導で課題解決に見通しが立ったため、教員1名とともに2回で指導を終了した。

(9) 関係機関との連携(在籍校・保護者・医療・福祉等)

兵庫県立障害児者リハビリテーションセンター(あまりハ)

1回目: PT 2名 / OT 2名 Dr. 1名

指導の様子の写真

2回目: PT 2名 / OT 2名

3回目: OT 2名

2 成果と課題

児童生徒の変容

* 今回の指導において、指導を受けたのが教員であったことをふまえて記載

(指導開始前)

- ・特に身体の変化の著しい時期でもあるので、姿勢・運動に関する面の調整をはじめとする、学校生活における学習環境や内容の検討が必要である。

【主な検討内容】

A：食具のグリップ部分の適合性。

B：立位台や座位保持椅子等及び摂食時等の補助的手段の使い方。

C：体幹に対する取組や座位保持椅子での姿勢の調整、今後に取り組むべき課題等。

D：当該生徒にとっての体幹装具のあり方（考え方）や側弯の進行予防に対する取組等。

(指導開始後)

- ・医療職との連携のもと、具体的な指導助言を受けることで、これまでの指導を見直したり、これまでの取組に新たなバリエーションを加えたりすることができた。生徒の実態により即した学習環境を整えることにつながった。

【検討後】

A：グリップ部分を再作成し、台等も調整したことで、食事時の環境改善を図ることができた。

B：立位台はクッション等で姿勢を調整することでより望ましい姿勢をとることができた。座位保持椅子については更新を検討するのが望ましいことが分かり、保護者への相談にもつながった。摂食時の補助的手段の使い方については、目的や効果を明確にした上で、今後の方向性を見出すことができた。

C：教師が身体に触れる際の配慮事項等を知ることによって、より効果的で安全にアプローチできるようになった。座位保持椅子についてはタオル等で調整し、より適切な姿勢をとることができるようになった。学習内容について新たな視点の提案があり、今後の取組を検討する際の幅が広がった。

D：保護者やかかりつけの医療機関との連携のあり方について検討することができた。また、今、学校でできる取組について、新たな方法を試行する機会を得られた。

成果

- ・自立活動の6区分のうち、「身体の動き」について、従来は来校指導を主として展開してきたが、今回の研究において、来校指導+『遠隔システムによる指導』で実施できる可能性が見えた。

⇒感染症対策等で来校者を制限せざるを得ない時期にも学習の機会を保障できる。また、授業の改善を図ることにつながる。

今後の課題

【遠隔システムによる指導を日常的に定着させるために】

①来校指導と遠隔システムによる指導の割合（バランス）

今回は3回の指導のうち、2回目を遠隔システムによる指導とした。3回目を来校指導にしたことで、2回目の遠隔システムによる指導だけでは明確にできなかった補助的手段のフィッティング等の部分をより細かく相談できたり、伝い合いきれなかった（イメージを共有しきれなかった）点について、互いにすり合わせたりすることができて良かった。今後は、遠隔システムによる指導をより効果的に活かしていくためには、どのようなバランスが望ましいのか、検討していく必要がある。

②遠隔システムによる指導の際の内容のあり方（可能性）

今回は、前回の指導助言を受けて実施してみた「報告」と、更に改善が必要な場合は何をどう改善するのか「再提案」をいただくことが中心になった。遠隔システムによる指導をより効果的に活かすためには、どのような内容で進めるのが良いのか、更に検討していく必要がある。

③人的、環境的な整備の必要性（教職員の ICT 活用指導力の向上、時間制限のない遠隔システムの導入）

今回の研究を進めるにあたり、校内で ICT 技術に長けた教員に頼ることが多かった。「遠隔システムによる指導」を日常的に定着させていくには、より多くの教師が ICT 活用力を向上させ、こうした取組が実施できるようにする必要性を感じた。また、今回の研究では、本校で使用している遠隔システムでは時間制限があって対応しきれず、連携先にホストになっていただいた経緯をふまえ、今後、本校でも時間を制限せずに使える遠隔システムの導入を検討していく必要がある。

3 ICT を活用した自立活動指導についてのコメント

（児童生徒、保護者、教員等の声）

- ・遠隔システムを使って、外部専門家に相談できる第一歩になった。
- ・遠隔システムによる指導を日常的に行えるようになるには、教師の ICT 活用力や ICT 環境の整備、（外部との連携をする場合には）連携先の理解や協力等の点で更なる準備が必要と感じる。
- ・文書だけでなく、遠隔システムを使って対面で相談できて良かった。